

～ 新型コロナウイルス感染症がもたらしたもの ～

コロナ禍の中で急激に増えたのがテレワーク、リモート会議やオンライン授業など新しい働き方や学び方である。セミナーなどは中止になったものも多かったが、初めてリモートセミナーに参加してみた。自宅に居ながらにして学習でき、会場まで行く時間を節約できるものの、これが日常になるとどうなんだろうという気がした。テレワークやオンライン授業など生身の人間と接することのない日々を送る会社員や学生たちがいると思えば、新型コロナウイルス感染症の感染のリスクを負いながらも人と接触する現場で働かざるを得ない人たちがいる。新型コロナウイルス感染症の影響で休業や失業に追い込まれた人たちもいて、それぞれの事情を抱えこれまでとは違う生活に戸惑いながら生きている。女性の自殺率増加も問題視されている。今年の7月以降自殺者が増加し、8月は女性だけでみると去年の4割増だという。新型コロナウイルス感染症の影響で配偶者からの暴力や子育ての悩み、経済問題が要因になっている可能性があるという。新型コロナウイルス感染症という目に見えない敵と戦っているような毎日であるが、私たちの生活や生き方そのものを今一度しっかり考える機会を与えられているようだ。

(森)

10月に入って流れた「弘前市で新型コロナ感染者が出現」のニュースに、いよいよ弘前にもきたかという思いが・・・全国に発令された「緊急事態宣言」の時とは別物の緊迫感が押し寄せてきた。私たちの自粛生活の先に明るい光が見えるのだろうか？



弘前市女性活躍推進企業のご紹介

弘前市では、女性の活躍を推進するため女性の雇用環境の改善に向けた自主的な取組を実施している企業等を「女性活躍推進企業」として認定しています。

女性の雇用環境を改善させることは、企業全体の成長、企業イメージの向上につながると言われています。

弘前市女性活躍推進企業への申請をお待ちしております。

詳細は市のホームページをご覧ください。

○令和2年3月から12月までの新規認定企業

認定番号	企業等の名称
第50号	社会福祉法人わかば会 理事長 三上 貴生 様
第51号	株式会社介護サポート 代表取締役 三上 貴生 様

編集後記

最近、交通事故で被害者・加害者共に親戚という笑い話があった。そんな街に新型コロナのクラスターが。でも多分、たおやかに、したたかにやり過ぎ今までは少しだけ違った日常に戻るのでしょう。梅

通勤途中で目にする岩木山。青い空にまっすぐにそびえるその姿の美しさにため息が出た。「さすが津軽富士！」久しぶりにゆっくりと眺める。あなたのことをすっかり忘れていました。ゴメンナサイ～。森

新型コロナで日常生活が変わってしまい、コロナ鬱が増えているそうです。これから更に冬に突入するとますます外に出るのが億劫になるものですが、健康に気を付けて乗り越えていきたいものです。のん

■編集発行
弘前市企画部企画課ひとづくり推進室 〒036-8551 弘前市大字上白銀町1番地1
電話：0172-26-6349(直通) FAX：0172-35-7956 E-MAIL：kikaku@city.hirosaki.lg.jp

田中弘子さん男女共同参画社会づくり功労者内閣総理大臣表彰受賞インタビュー

弘前市職員時代から男女共同参画を実践し、現在はNPO法人青森県男女共同参画研究所理事として活躍されている田中弘子さんが、長年の男女共同参画社会の実現と推進についての功績を評価され、男女共同参画社会づくり功労者として内閣総理大臣表彰を受賞されました。

これまでの活動や想いについて田中さんに伺いました。



- 現在の役職
NPO法人青森県男女共同参画研究所理事、社会福祉法人抱民舎理事、社会福祉法人聖康会理事
- これまでの主な活動歴
昭和45年 東洋大学社会学部卒業、弘前市役所入庁
平成6年 セミナー・ハンサムウーマン設立
平成14年 弘前市の女性行政職として初めて管理職に就任
平成19年 弘前市役所退職、男女共同参画ネットワーク・津軽広域設立
平成19年～平成25年 NPO法人あおもりNPOサポートセンター理事長
平成24年～平成28年 社会福祉法人抱民舎理事長
平成27年～令和2年 NPO法人青森県男女共同参画研究所理事長
- 主な受賞歴
平成25年 青森県いきいき男女共同参画社会づくり功労賞受賞

ーまず、田中さんが学生時代の頃（昭和40年代）の状況を教えてください。

私は大学で社会福祉主事という資格を取得していたので、弘前市役所の福祉事務所にケースワーカーとして入庁したのですが、当時女性の仕事といえば事務「補助」で、男性と平等に働けるものではなく、新卒の若い女性がケースワーカーをするなんて考えられないという風潮でした。

私の父が「男とか女とか関係なく、勉強したいなら行ってきなさい」と背中を押してくれ、東京の大学に進学し、常に問題意識を持つことを学びました。当時、大卒の女性は珍しかったし、東京の大学に女性を行かせるのはもっと珍しかったと思います。女性は良妻賢母になることが望まれていました。

ー市職員時代に取り組んだことなどを教えてください。

当時は執務スペースで喫煙でき、たばこの灰皿を洗うのは女性職員だったので、灰皿を洗った手を見せて「たばこの灰ってこんなに指が真っ黒になるんだね、これだったら肺も真っ黒になるよね」と言ってみたら、男性職員が率先して灰皿を洗いました。拒否するのではなく、工夫することで男性の意識を変えることができました。私が上司になった配属先では、「お茶くみはみんなでやってちょうだい」と呼びかけました。イクボスと同じでしゃべらないと変わらないですし、部下からは言いにくいですよね。そういう想いから平成11年に男女共同参画社会基本法が制定されたとき、管理職になって変えていこうと決意しました。

ーNPO法人を立ち上げて活動されていますが、どのような経緯で設立されたのですか。

実は、市職員時代からもボランティア活動はしていたのですが、ボランティアだと資金面など様々な理由で煮詰まり続かないケースもあります。長続きさせるためにはどうしたらいいのか考えているときに、NPOという考え方が日本に導入され勉強していたところ、国立女性教育会館の男女共同参画推進

フォーラムに参加しました。参加者はほぼ女性だったので、男女が参加できるセミナーに参加してみたいと思って選んだのが「NPOとボランティア」というテーマでした。これが契機となり男女共同参画とNPOを勉強するようになりました。

ー自身が就職した頃と比べて「変わったところ」と「変わらないところ」を教えてください。

まず、女性管理職の割合が低いのは今も変わっていませんね。それと各国における男女格差を測るジェンダー・ギャップ指数も153か国中で日本は121位（令和2年）と低いのは変わっていません。これは「気軽に働きたい」「部下をもって長時間労働になるのは嫌だ」という意識の女性がいる一方で、今でも「女性を同じ立場にエントリーさせたくない」「女性は向いていない」という男性の意識があるのでしょうね。この辺は国が意識してやっていかなければならないと思います。例えば、ファザーリング・ジャパンでは男性の育児休暇の取得率向上が必要だと言っています。そうすれば子育てや女性の大変さを理解し、家事や育児を共同でやることにつながるので、まずは女性を理解する環境づくりが必要だと思います。男性の育児休暇取得はボウリングという1番目のピンで、そこを倒さないと連鎖していきません。ひととして生きやすい社会をどう作るかですね。

ーこれから取り組みたいことを教えてください。

平成19年に津軽広域管内8市町村で構成する「男女共同参画ネットワーク・津軽広域」を設立し、市町村担当者ネットワーク会議との2本のレールで運営しています。行政と民間の交流をもつことが大事だと思っています。平成6年には「セミナー・ハンサムウーマン」を設立し今年で27年になるのですが、これらを継続していきたいですね。

ーこれからの時代を担う若者に期待することはありますか。

自分自身のことは自分で決めてほしいし、そういう人生を歩んでほしいと思っています。特に男性には育児休暇を是非取得してほしいですね。

工夫と努力で自らの人生を切り開いていった田中さんですが、後進の育成や地域のネットワーク作りを通じて、地域全体で男女共同参画社会の実現に取り組んでおられる姿が印象的でした。

ひとにやさしい社会推進セミナー

絆か柵(しがらみ)かー身近な人間関係の二面性ー

令和2年11月25日、ひとにやさしい社会推進セミナーをヒロロで開催し29名が参加しました。弘前大学人文社会科学部講師古村健太郎さんを講師に招き、対人関係の光と影、その対応方法についてお話いただきました。講演の中で、私達は対人関係としてネットワークをもっており、重要な問題を相談できる人は5人程度であるとされ、それぞれに様々な役割を分散しているそうです。また、対人関係の影の部分としてDVやストーカー、偏見や差別が挙げられるとのことでした。恋愛関係の場合では相手

を特別な存在だと思うがゆえに相手に自己主張できなくなり、間接的DVの被害が増加する可能性があると言われ、褒めることやお礼を言う協調的な行動、欠点を指摘する非協調行動を相手に示すことで将来の間接的DVを防ぐことができるとお話がありました。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大が懸念される現在において不要不急の外出を控えるなど人と対面する機会が減少している中、改めて人と人とのつながりを考える機会となりました。



きらめく人、ときめく心



☆今回のきらめく人 佐々木 洋子さん

第3回目は、一般社団法人弘前芸術鑑賞会副代表理事で立ち上げに携わった佐々木洋子さんをご紹介します。何歳になっても進化し続ける佐々木さんの行動力には脱帽するばかりです。

○多くの芸術を学びながら開花

先の東京オリンピックから10年、時は高度経済成長期の真っ只中、まだコンピュータがなかった頃の職場環境は過酷で、社員皆が12時間労働を強いられるような時代だったそうです。このままではいけないと思い、29歳のとき華道と木目込み人形の教授免状を活かした仕事に就こうと決めたそうです。その後、東京の真多呂人形学院に10年通い個人レッスンも受けながら木目込み人形を学び、その傍ら桐彫彩画も制作、40代になると華道の大阪の本部へ15年間通いながら、造形大学で6年間造形を学んだそうです。

50代になると造形の世界で周囲からも評価され受賞することができたそうです。（作品を観させていただきましたが、芸術に疎い私でもコンテンポラリー【現代的】という言葉が浮かびました。）

○一般社団法人弘前芸術鑑賞会の立ち上げ

地域の皆さんに舞台芸術を鑑賞してもらい心豊かな生活を送ってほしいとの思いから、有志で一般社団法人弘前芸術鑑賞会を立ち上げます。チケットのインターネット販売をはじめ、自分達で企画運営をしていると誇らしげに語っていました。

また、弘前大学クラシックギターOB・OG会「バクの会」の運営をしており、全国にいる会員150人との親睦、学生の定期演奏会の支援をするのが忙しいと言いつつも楽しいようです。

周りからリーダーに推されることも多く、いつも「私でいいのか」と悩む反面、「私ならできると思って推してくれたのだからできる！」と思うことにしているという佐々木さん、何歳になっても進化し続けるその行動力に心がときめきました。（梅）

わたしと本

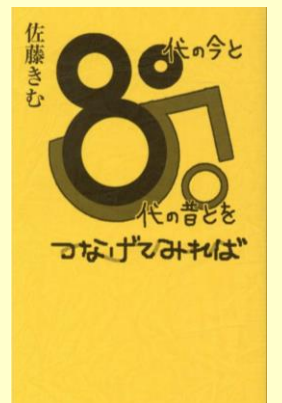
80代の今と50代の昔をつなげてみれば

本屋に立ち寄った際、著者名と題名に目を引かれ、その場で立ち読み、ついついクスッと笑ってしまう面白さにつられて買ったエッセイ集です。著者は元弘前大学教育学部の佐藤きむ先生。

この本は、五十音順別にテーマがあり、50代の昔と80代になった今、同じテーマで記したエッセイをつなげて収録しているのが特徴で、どこから読んでも楽しめます。

例えば、「あ」では「味付きゆで卵」がテーマで、昔は殻にはひび割れの跡がないのに塩味がゆきわたっている不思議さを楽しんで、80代の今でも卵かけご飯と目玉焼き好きは変わらない。ただ、今は卵1個の値段が、年金の増額の重みを伝えることができる優れものであると紹介しています。

佐藤きむ先生の目のつけどころに「なるほど」と感心させられ、期待を超えて楽しく読ませてくれます。（のん）



著者 佐藤きむ
発行 津軽書房